

文久四年二月五日より文久四年二月六日まで

P8311082 right

(桑)折宿へ着、前田勘四郎元手代壱人出迎へり、当宿は至極の貧宿と見受らる、一家も富商と見るへき家なく、本陣も僻地の廃寺に頼せり、産物

六日丑 晴風 朝四十七(撰氏八)度 昼五十二(撰氏十一)度

朝第五字時出立、前田勘四郎元手代見送りとし出役す、藤田小休、貝田村地内御料より仙台領(仙台領)入口に伊達郡大庄屋某帯刀にて出迎、領主足軽兩人先導越河(こすゝ)に至り、領主家来壱人出迎へ

同所へ小休、領主より午飯料理の設ある趣を以申勸しかとも、朝餐間合無しに付、其設は喫し候積り

取斗受度旨を以辞しぬ、仙台領大庄屋某相越し、一躰領分境迄郡奉行代官等出迎領内

始終□添え、先例の処昨夕先触到来いたし、城下迄申遣し候儀に付、里程拾六里有し間、何分着いたし

不申段、断り申聞る、此小休所は、(領主小休に兼て設けおけるにて諸侯通行にも、此所に

入を許されるなり)御用旅行等のもの休泊のため領国より役置ける事と相見え□□

家作の経営、馱に本陣の模様にて常は空家にて農商居住の躰無し、出立途中領主家来

P8311082 left

壱人出役いたし居る、途中において、郡奉行壱人出向來り、其場より直に随従し來れり

左旁、牛馬沼

と唱ふ一湖を見る、周り、五六町程もあるへし、夫より道を中央に突出の石あり虎石と唱ふる由形ち□虎に

似たる故なるべし、程なく鑑(あぶみ)石といふに至る、古昔源義家上洛の砌、此に至りて、道狭く石角突出して馬の

鑑をすりしにより下乗して自ら馬を引て通りしより其名起これりと土人いひ伝ふる由、小石の擬結(ぎょうけつ)せる

石道の左右に突出し今に歩行にあらざれば通行なりがたし、人功を以て開かば平坦の地になりへども前文、

第十

二字時前午休所白石に至る、当所の富□大諸侯の領なりを知る、惣町数拾九町人家稠察に軒(白石休)を並ぶるは六町也とぞ、城下国分町の繁栄察すべし、本陣も巨屋にて美麗也、午飯の設

淡味

錦地に類す□すべし、汁(豆腐、鮭子)、平(鯛切身、うに□□)、向附(鮭塩引切身、ここの茸、うど一へぎ)猪口(人参細引、鯉節懸け)、但し香の物を

畝く、同所郡方役人某來り付添の儀申聞、且領分境出張可致処、此事承知いたし延済相成

()内は細字双行(一行に小さい文字で二行書き)などの場合です。

□印は解読未了の文字です。私の実力ではすぐ解読できません。

【判読不可】、■は、文章の一部に汚れ、虫食いにより文字が無い等です。